

# ふるさと奥尻通信

平成25年9月30日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭語

酒が飲める、酒が飲める、酒が飲めるぞ♪ 酒が飲める、飲めるぞ、酒が飲めるぞ♪って唄知ってます？昔の唄ですね。どんだけ酒好きなのだと、あきれてしまう島の人。え？誰のこと？

## 特集 奥尻島と酒のはなし

人間の生活に酒は欠かせません。と言ってしまうとやや語弊がありますので、太古の昔から、人間社会には酒がつきものでした、と書きましょうか。一説では縄文時代から酒があり、それは嚙んで唾液と交えることで発酵させる、原始的な酒だったろうと言うことです。

日本では客人をもてなすのも酒宴であるし、祝いの席でも、甲斐の場でも酒が出てきます。宗教の教義として飲酒を制限している国もありますが、全くいけなしていない国は、世界でもほとんどないでしょう。それだけ人間と酒は切れない縁なのです。

しかし、過去には飲酒を制限し、違反者には罰則を科した時代がありました。有名な禁酒法はアメリカで大正8年(1919)に発布され、昭和8年(1933)に撤廃されたもので、連邦法的には14年間続きました。ギャングの首領アルカポネが暗躍した時代です。これとは別に、明治の中期には日本のみならず、世界を巻き込んだ禁酒運動がありました(詳しくは本紙第15号参照)。当時、奥尻では数年間の不漁が続く、畑作が進展していない頃でしたので、島民は貧困にあえいでいました。



島に残る焼酎德利(近代?)



擦文時代のぐい呑み?(1000年前頃)

明治18年の頃、旧熊石町関内(現八雲町)出身の沢口富士吉は、民間に倹約を説いて回り、魚が捕れぬと言っては酒を飲むだけの怠惰な生活を改め、酒を排除することで、精神衛生を保ち、貯蓄を生むことで生活を安定させようとしてきました。この運動は、札幌はじめ、遠く京浜地方でも同時発生的に起こっており、全国的な広がりをみせました。また、キリスト教系外国人女史による啓発運動に呼応するものだったため、世界的な展開をみせました。しかし、奥尻の場合は、明治23年になって、理解のあった林頭三郡長や、規約を全島に適用した太田広徳戸長とともに退任したため、奥尻島禁酒会は解散することとなりました。理由は、結社の自由の無い時代でしたので、道庁が好ましくない反体制勢力と見なし、圧力をかけたからでした。沢口は家族と共に函館へ去ります。

さて、その後島では酒造りが再開されます。明治34年(1901)には、奥尻地区の畝本久次郎が塩釜川の清流で仕込んだ「奥尻川」を醸造、発売。これは短期間で廃業しますが、時を隔てた昭和63年(1988)には、商工会発案による「わかめ焼酎」の発売(製造委託)、平成21年(2009)には島のぶどうで醸した「奥尻ワイン」が陽の目をみました。北海道のワイナリーは20ヶ所もありますが、自家栽培のぶどうを使用しているのは、わずかに3ヶ所だけのこと。注目をあびる理由がわかりますね。

これから寒くなると、「秋の夜長、酒でも飲むべ」となりますが、個人の適量を越えますと、社会生活に悪影響を及ぼしますので、あくまでも「お酒はおいしく適量を」心がけましょう。TPP参加によるワイン関税撤廃問題が気になるところです。



青苗遺跡出土の焼酎德利(近世～近代)



広告看板



沢口富士吉



海亀捕獲で祝い酒 共進丸の山下伝三氏(昭和37年)  
新盛丸・共進丸の春巻鮫網が美の唄沖で捕獲



島のワインを醸すぶどう

奥尻は雨が多い島です。スコールのような雨が突然降り出すことがたびたびあります。最近では本州の都心部でも「ゲリラ豪雨」と呼ばれる大雨や竜巻が発生して、突然の気象変化の怖さを実感させます。

奥尻において、昭和37年と38年は災害の連続した年でした。先月紹介した昭和38年5月の大火に続き、9月16日には秋の大雨により塩釜川が氾濫し、濁流が奥尻市街地を襲いました。島内各地の河川が氾濫し、赤石地区では山津波が発生するなどして、被災者259世帯の1104名、死者6名、行方不明者3名を出し、家屋全壊30戸、流失19戸、半壊33戸、浸水150戸で、被害総額6億2835万4000円という惨事となりました。前年の37年8月にも洪水が発生しており、島民は”トリプルパンチ”を受けた格好となりました。9月の氾濫は、5月の大火後の復興作業が行われていた最中でしたので、立て直した家が再び被害を受けるなど、人心への影響が心配されました。村(当時)では、11月までに応急仮設住宅を宮津、奥尻、赤石などの各地区に全17戸建設し、復旧につとめました。また、災害救助法の適応を受けたため、河川、橋梁、道路の改修工事が実施され環境改善がなされました。



救助作業にあたる住民



護岸の破壊と橋梁の落下



月刊 奥尻のつり 9月号

恒例、さびき釣りのシーズンです。どうい訳かさほど大きな水揚げがない神威脇漁港に小魚が良く入るのです。あわび種苗センターがあるからかな？エサの養分が流れ出ているのか？と想像させますが、9月初旬からアジやサバが盛んに釣れ始めています。また、奥尻港湾でも30cmを越えるフクラギ(ブリの幼魚=イナダ)が出始めました。フクラギやブリの本場は富山県ですが、向こうでは12月に”ブリ起こし”という大きな雷が鳴るころに「寒ブリ」の最盛期を迎えます。「ブリ大根」という料理は、実はブリではなくて、大根をメインに食べる料理なんです。味の染みだ軟らかい大根が主役なのです(味を想像しただけでビロでできた)。ブリが買えず、安売りのフクラギの刺身ばかり食べていた富山での生活を思い出すなあ…。

昭和奥尻生活詩 9回

奥尻郡釣石尋常高等小学校一年生「詩集・海に生きる」より

月雪讀す何繰つす烏讀沖一	鳥
がめら時返かぐ賊むへ昨日の	賊
光ギるすのしな本がけ讀本の晩	つ
つらよら間てくをつくい古を	りの
てギうと居るるとまと	晩
見ラになっうとて	
えるなつち	
一晚たに讀釣	逸
一だ、二九	見
	喜
	栄

し術ぶ講芸たど画か蔵れでた館り座員。四、らさ、九。ののにも期十彫、れ道移月。作開あよ間一刻国て立動十三品催りる中点、内い近美三日をと、展はがガはる代術、堪な島示、展ラじコ美術館、能つ民解美示スめレ術が十七したは説術さ工世ク館実他施日て移十や館れ芸界シ他の活七入のま品のヨにさまま美年門学しな名ン収

世界の名画が一堂に



かるた大会

けはでよていは楽か札ネた方ミ  
ね、しうはる普しみにイを言一先  
な誰よで使の段みとよテしを日  
あのう、わでかま、つイて学委  
！さ。新なすらし心てブ遊ぼうが  
し「鮮いが島た地、発びうと主  
はずおに語、言。よ方音ま、あり  
傑もら感句世葉島い言にし、ナ  
作うだじも代にのテのよた。奥  
。けつたあに慣子持る。尻、イ  
ねけこつよれ供ポつ読地かト  
す とたつてらを暖み元

奥尻かるた遊びまじょ

ようやく夏休みを取りました。第二の故郷青森へ出かけ、ついでに関東まで足を伸ばし、久々の大都会を味わいました。帰島したら、なんだかホッとしたのは、私も島人になった証か？けれど、散財です。残高が減ると、都会だと非常に不安なのに、島だと全然不安感が無いのは不思議なもんですね。なんとかなるべい！と悠長に構えるこの頃でした(金欠しんだ)。

新来之記録(編集後記)

化地が実しがた性会島県度域  
に元終行た移。をが対がお総  
つにわす地住都紹あの馬あこ務  
な住つる域し会介り担市りし省  
がみてと振、かし、当(ま協の支  
る着もい興そらてそ者韓す。隊「業  
とき、う策の志もの国。交に先「事  
か、そをも土のら概交に先「事  
地のの模地あい要流近日と業  
域大。索をるまとす接、いに  
活半期し生若し有るす長う一  
性が間、か者用機る崎制地

離島の情報発信中!



青苗地区の葬儀 昭和37年